

磐越銀行

飛躍せんとする
中野、瀧澤兩氏の努力
財界動搖に際し預金取引者に迷
惑を懸けたくないと一大努力を
拂つてきた磐越銀行の、支配人
瀧澤俊平氏は内外の折衝に努め
て同行の安泰を計り、頭取中野
甲藏氏は石城経済界を救済しな
ければならぬといふ抱負を持ち
中央有力者を往來大に努力す
る所あつたが、愈々昭和四年の
初頭にあつて、沈滞した石城の
財界を打開せんとするの目鼻が
就いたといふから、磐越の基礎
も益々強固となるであらうと観
られてゐる。

武田所長榮轉

電力株式會社平營業所武田精一
氏は今回郡山支店營業課長に榮
轉したが、氏は平支店長として
赴任以來滿八年一般の氣受け好
く、その轉任を惜まれてゐる。

旬刊同業 新年宴會

革新聯盟主催旬刊同業の新年宴
會は十日午後六時より旗亭末廣
に開催した、來賓として猪狩署
長伊藤特高、横地高等、野崎、鈴
木兩縣議會參事會館に散會した

回春園

川井園長の努力
縣立豊岡回春園は川井園長赴任
高橋龜松氏、奮闘主義を以て

常磐は結局 七十七の敵ではない

山田支店長の營業策は
地方經濟を救ふ

平銀行が休業した事は、兼て
濱通り方面に野心満々として
其機を窺つてゐた常磐銀行の
進出を早めた事になつた、創
立三十年山崎與三郎氏が手摺
に懸けて育んで來た平銀行
も二月中には常磐銀行平支店
と變る譯だが、多年の懸案が
意外に其機を早めた常磐も影
では舌をペロリと出して、意
味ありげな笑を洩らしてゐる
事だらう。

知られてゐる氏は、來る五月
の町會改選には前回の雪辱戰
をなすべく意氣軒昂。
▲山崎登氏 歳末に當つて四十
度もある熱を押して出社する
努力家、新年初頭に當つて大
元氣で或事業を計劃。

平銀の合併開業は 財界不安を招く

悔を千載に貽すであらうと
某有力者の談

平銀行も六對四の比率に依つて
常磐銀行と合併する事に決定し
てゐるが、是れに就而某有力者
は語つた。
「石城の土地に本店銀行の存在
が意に力弱くなつてゐる事は
遺憾に堪えない、平銀行は決
して單獨開業すれば出來ぬ事
はない、唯夫れは勇斷と正し
い策案如何による事だ、私は
一時的に取引者、預金者の財
和を計るよりも、永遠的な財
界の安定を希望する高橋氏其
の

反して、貸出しの如きは預金
高の三分の一弱だ、それだけ
石城地方の商工業者の悩みが
深くなるばかりだ。
百七銀行支店が常に預金を吸
収するばかりで貸出しが極め
て僅少な点から商工業者の怨
嗟の的となつてゐた事は事實
だし一般から頗る人氣が無か
つた、そうした銀行の進出は
地方經濟界にとつて最も嫌忌
せねばならぬやうな空氣が醸
される事は當然であらう、と
ころが、今將に石城地方の財
界に黒い手を差しのべて、羽
ばたきと妖艶な微笑を洩ら
してゐる常磐が百七以上に
地方の預金をなめ盡さんとす
る魂膽があるのだから、應て
石城の人心の離れゆくのも自
然の成り行きかも知れない。

賀正加納外一

りでなく、常磐銀行支店とな
れば、到底石城地方の金融は
潤澤にはならない、遊金は吸
收され、貸出しは知れたもの
だ、故に平銀が合併開業した
事は石城の財界を永遠に暗く
した事になる。高橋氏其他の
人達は必ずや悔を千載に貽す
時がきよう」

一方近來日に石城の經濟界に
飛躍して人氣の中心を握つて
ゐる七十七銀行平支店は、既
に其營業策の根柢に於て大な
るけじめがある。平の商工業
者は七十七の爲めに救はれる
点が頗る多い、常に預金高よ
りも貸出し高が多く、先月來
の狀態を窺つて見るに、預金
高が百萬足らずであるのに、貸
出しが百四十萬に及んでゐる、
出た百四十萬に及んでゐる、
殊に磐城銀行が休業し、續い
て平銀が休業するといふ不安
時代に、預金よりも貸出しが
多かつたといふ事實に徴して
も石城地方の爲めに如何に貢
献してゐるか、人心不安を緩
和してゐるか、窺知する事
ができる、七十七が一般取引
者、石城の人々から禮讃され
るのも無理はない。

謹賀新年

- 縣會議員 (順ハロイ)
- | | | | |
|----|----|----|----|
| 山崎 | 古川 | 鷺木 | 鈴木 |
| 崎 | 崎 | 清 | 辰三 |
| 滿藏 | 吉平 | 昇 | 郎 |

山崎登

- 謹賀新年 (同不序順)
- | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|
| 吉田 | 比田 | 佐田 | 高田 | 門田 | 久保 | 江尻 |
| 宗源 | 信愿 | 藤敏 | 岡井 | 木田 | 保田 | 龜太 |
| 雄造 | 道治 | 三郎 | 三郎 | 三郎 | 三郎 | 三郎 |

住吉屋本店

蒲鉾製造、仕出し、鯉節
電話三〇五番 藤
遠藤市松

木宮雄

石城郡第二區
教育事務協議會
湯本信用無盡
株式會社

古鐵拂下げに 奇怪な風説

に少しの支障も無く、植田地方
の財界を安定してゐるが、是れ
は平素健實を旨として其基礎を
正月四日、今日は何んといふ

謹賀新年

磐城經濟新報社 鈴

日向ぼつこして

山崎傳重

謹賀新年

磐城經濟新報社 鈴

木宮雄

意外に其機を早めた常磐も影
では舌をペロリと出して、意
味あふげな笑を洩らしてゐる
事だらう。

の敵ではあるまい。常磐の營
業策から言つて石城の金融界
は決して潤ふ所か、預金はほ
んど本店に運ばれてゆくに
然の成り行きかも知れない。

和してゐるから、窺知する事
ができる、七十七が一般取引
者、石城の人々から禮讃され
るのも無理はない。

つてゐるのは七十七平支店
ある。今後益々光輝を放つて
ゆくものは唯七十七平支店
のみだ。

平町二丁目
電話三〇五番 藤
遠藤市松

古鐵拂下げに 奇怪な風説

古物商と結託して 不正な金を儲ける

四ツ倉町某會社に在つて重要な
位置を占めてゐる長瀬某は常に
已れの位置を利用し不正行為を
敢てするといふ怪聞は一部の識
者間から頗る指彈されてゐるが
其内容を調査するに廢材（重に
古鐵）を拂下ぐるに當つて已れ
腹心の古物商山田某にのみ拂下
を指名しつゝあつたが、過般拂
下古鐵四ツ倉驛から山田某宛に
十噸の鐵材を輸送し平驛に於て
荷受けに際し不可解にも十噸の
筈の古鐵が二十三噸に變つてゐ
たといふ事實があるが、其間に
山田某と結託して不正の金を利
得し長瀬某は毎夜の如く平新田
町に出沒して遊里の巷に耽溺し
てゐるといふので會社内部の者
よりも批難の的となつてゐるが
近く此内幕は曝露されるらしい

市場法に抵觸すれば 容赦なく處斷する 反對問屋連結局

かぶこを脱ぎかける

大なる期待の下に設立された平
半は自暴自棄となつた三國屋、
突戸屋の連中は路傍に於て市場
式の魚取引を行つてゐるといふ
ので目下問題にならんとする
が、其筋に於ても市場法に抵
觸するが如き行為があれば苛責
なく處斷せねばならぬと言つて
ゐる。

連日取引 繁忙を極めて

魚市場は
反對して暗に其實現を妨害する
が如き行動に出た魚問屋突戸屋
三國屋一味の者は最初四丁目舊
市場の權利を現市場の社長であ
る加納五郎氏に三千五百圓を以
て譲渡してゐるに不拘、更に讓
渡金の三千五百圓では不足であ
る如く難くせを著け、一味の者
は四丁目の町營魚市場を設立せ
んと計劃したものの、
四丁目の反對に會ひ其
郡南地方の經濟界に重きをなし
計劃も立ち消えとなつたので、

健康を見せる 磐城銀行

金成支配人の努力

郡南地方の經濟界に重きをなし
計劃も立ち消えとなつたので、

新聞の新聞

【卅三】

未曾有の財界危機時代に遭遇
して、最も打撃を蒙つたもの
の一つ、それは在平新聞經營
者だつた、年賀廣告は新聞經
營者の書き入れ時だのに、遠
慮するといふお互のやさしい
心根があるもので、例年の様に
歩るき廻ることは慎んだ格
ツこうだ。

從つて懷の具合が淋しく、新
年らしい気分にもなれず、新
年早々四日間は家の中に籠城
してしまつた、唯舌鼓を打つ
油のやうな酒にしたつてゐた
のが關の山だ。

磐城銀行が休業したとき、旬
刊十二社が結束して難のあつ

日向ぼつこして

正月四日、今日は何んといふ
恵まれた日だ、南向きの二階
に終日考へることもなしに黙
してゐる中に日は暮れた、風
も無い、綿をちぎつて投げ散
らしたやうな白雲がフウラリ
と浮んでゐる、ながやかな一
日ヂットと思ひしめてゐると自
ら幸福感にじんできてる。

戀も、金も、希望も心の底に
押しかくされて平靜が續く
冬は寂しいが、こゝろは恵ま
れたなごやかな一日でも思
ひてゐる自分を眺めると寂し
さも、惱みも消されてゆく
山も野も川も海も、今日一日
は靜かに呼吸を續けてゐる、
日は流れる、平和な一日、そ
れも、もう幾何もない、日が暮
れることもたまたまの息づまるや
うな冬の精が訪れてくるのだ

冬の日が次第に弱くなつてゆ
く、斜陽がガラス戸を透して
自分の背に力なく照る頃二羽
の鳩は中を駆けまわつて歸
つてきた、灯のともる頃も
まあるまい、城山から揺る
鐘の音の響き渡る頃も、まも
ない事だらう。

或る夕暮れ、或る料亭で酒を
汲んでゐる利那、六時の暮れ
の鐘が余韻をいいてどけてゆ
く頃、何故か眼の底に泪がこ
んとくる、鐘の音が戀しい
鐘の音がなつかしい、鐘の音
に暮れ、鐘の音に明ける京の
町がなつかしい。

た平銀吉田監査役の聲明書を
駁して、休業磐銀に力をつけ
てやつたのは昭和三年の忘れ
難い事實だつた。

其後平銀が常磐銀行に合併す
ることか、せぬぞかの際、旬刊
四社より成る革新聯盟が快然
起つて合併反對の聲明書を發
し、相續いて、常磐銀行に反
省を希望を求め、富豪堀江某
糾彈すべしと聲明した事實も
昭和三年だつた、昭和三年は

高久村 山崎傳重	石城郡第二區 教育事務協議會	湯本信用無盡 株式會社
平町公立學校校長 懇和會	石城郡 第四區校長會	平町料理屋合組
石城郡第三區 小學校校長會	平町二丁目 御料理越乃家 電話三三〇番	市原病院 院長 市原卯太郎
平三業組合	關内油店 店主 關内 正一	小名濱漁業組合 組合長 立花雄七
湯本郵便局長 鯨岡潔	山崎合名會社 電話一〇番・二七番	森合齒科醫院 植田町
平町二丁目 西村屋藥舖 電話三番	好問村小學校 職員一同	農工銀行平支店 阿部六三郎
平材木商業組合	小名濱町 町長 鈴木榮 助役 高木保	七十七銀行平支店 山田勇太郎
平町旅館組合	平町三丁目 三井吳服店 電話三八番・七五番	植田町 大平千秋
平館 松田卯次朗	平町四丁目 鶴屋洋品店 電話一四〇番	植田郵便局長 馬上守一
石城郡 第一區校長會	平町四丁目 關内藥局 關内榮助	伊藤淺之助

磐城新報

發行日五日、廿日(二回)
印刷所 鈴木昌雄
發行人 鈴木昌雄
編輯所 磐城新報社
社址 磐城郡平町
電話 五五五(五五五)

賀正

謹賀新年

高岡唯一郎

株式會社平魚市場

有煙、無煙、各種石炭

高橋龜松

平町白銀町

磐城水産工業株式會社

社長 小野 晉平
支那人 福尾伊太郎

小野 晉平

小田 吉治

小田炭礦株式會社

社長 萩原申八

石城郡銀行組合

四倉會社銀行組合

江名町役場

町長 河野 嘉藏
助役 右色 彌
外吏 員一同

平町田町(電話四五六番)
駒場株式店

加藤丈夫營業所

平白銀町(電話三三番)

平町藝妓屋組合

磐城炭礦株式會社礦業所

島田 三

東部電力株式會社
平營業所

入山採炭株式會社

入山坑務所

豐間大敷事務所

豐間村

遠藤只之助

吉田正雄

江名町の作

山野邊藥局

山野邊東次郎

二本松電氣小名濱營業所

縣立回春園

園長 川井重之

平電氣株式會社

栗原欣次郎

堀江工業株式會社

江口忠一

平陽舍 吉田新聞店

吉田禮次郎
吉田喜代治

高久病院

院長 高久 忠
外 一 同

醬油味噌 植田町(電話七一番)
大平喜治商店

植田町

片岡醫院

院長 片岡 章

額賀廣次

謹賀新年